

# 東京2020における メディカルサポート

## 1 Introduction はじめに

東京2020オリンピック（以下、東京2020）はCOVID-19感染禍の中、1年延期、無観客開催など、これまでは類を見ない大会となった。さらに、オリンピック期間においては、日本国内では第5波にあたる感染再拡大の傾向もあり、開催自体が危ぶまれる状況の中、さまざまな方のご尽力のもとで無事に開催することができた。選手に4年に一度という大事な機会をいただいたことに心からの感謝を申し上げたい。

筆者は東京2020陸上競技のチームドクターとして大会に向けてのサポート、東京で開催されたTrack & Fields種目に帯同し、選手のメディカルサポートに従事した。

図1 国立競技場：夢のオリンピックの舞台



## 2 Special support for TOKYO 2020 特殊なサポート

本大会においてはCOVID-19感染禍の影響により、これまでの大会にない特殊なメディカルサポートとなった。

### #1 「バブル方式」による管理

COVID-19の感染が拡大していく中、「バブル方式」がオリンピックにも導入された。開催会場、宿舍、練習会場を大きな「泡」で包むこみ、選手、コーチ、関係者の外部との接触を遮断

して大会を実施する方式である。幸いにも、国際的には2020年の半ば頃よりこの概念が広がり始め、アメリカのプロバスケットボールリーグ「NBA」や、大きな国際大会などでも導入されていた。オリンピック前には日本においても体操の国際大会等で実施されていた。

選手村に入る前に健康観察アプリOCHAを登録することが義務付けられており、PCR検査にて陰性であることを前提にバブル内に入ることができた。入村後はOCHA登録とPCR検査が毎日行われ、原則バブルから移動できないような仕組みで選手村、練習会場、大会会場が厳密に隔離される体制となっていた。日本国内では、オリンピック開催期間中、爆発的感染拡大の報道が絶えない状況であったが、選手村内は厳密に管理され

医事委員会委員

鎌田浩史 KAMADA Hiroshi

### 大会概要

東京2020は2021年7月23日から8月8日に開催され、陸上競技のうちTrack & Fieldsは2021年7月30日から8月8日まで10日間、東京の国立競技場（図1）で行われた（競歩、マラソンは札幌開催）。

選手団は選手66名（会期中に1名変更）（男子44名、女子22名）、監督・コーチ・スタッフ46名の総勢112名であった。オフィシャルなメディカルサポートとしては医師2名（鎌田/札幌：鳥居）とトレーナー3名（東京2名/札幌1名）が帯同したが、東京においてはさらに医師1名（田原）とトレーナー2名、札幌においてはトレーナー1名が村外メンバーとして対応した。

ていることもあり別世界のような印象であった。

我々を含め、選手はいったん選手村に入ってからにはバブルの外に出ることはできないため、ギリギリまでこれまでの自分たちの環境の中で調整をして入村するという体制をとっていた。選手村宿泊でない村外対応トレーナーは、近隣のホテルに滞在しながら、外部との接触がない同じバブル内で制限され、徹底した感染対策の中で選手村に入村することができ、サポートに従事することができた。

### #2 COVID-19感染に関わる問題発生

幸いにも、今回派遣となった陸上選手団においてはCOVID-19の発症は認めなかった。しかしながら、COVID-19に関わる問題がいくつか発生した。

一つは、移動のために利用した公共交通機関の中にCOVID-19感染者が発生した事例である。同乗した交通機関の中において、たまたま陽性者が出たものである。席が離れていたこと、マスクをしっかりと着用していたこともあり、濃厚接触者とならずに厳重な経過観察のみで事なきを得たが、感染に対する危機を感じつつ、選手と一緒に祈るような思いで経過をみていた。健康状態や検査結果はその後まったく問題なく、選手は無事に競技をすることができた。

もう一つは、大会間近に選手の関係者に陽性者が出た事例である。選手に感染兆候はなかったのは大変良かったが、選手と接触があったことを念頭に、周囲への拡大を考慮し、他の選手と行動をともにしないことが求められた。こちらに関しても、幸いに体調の変化や感染は認めずレースにも出場することができた。

これら一連のCOVID-19対策に関しては、TOKYO 2020 Playbooks のマニュアルに準じるとともに、JOC日本代表選手団の「新型コロナウイルス対策責任者：CLO」である土肥美智子先生のご多大なるご協力をいただきながら対応することができた。

### #3 自国開催

本大会は自国開催であること自体が特殊であった。大会直前

## 3 During TOKYO 2020 大会でのサポート

本大会では、大会期間中に肉離れを受傷した選手の対応を行った。持参した超音波診断器を使用しつつその程度を確認し、症状に合わせてトレーナーとケアをした。同時に、HPSC練習時に固定用のバンドをJISSクリニックより入手し、試合までに行える限りの調整を行った。何とか試合には出場することはできたものの、自分のパフォーマンスを発揮することができずに悔しい思いをした。試合後にはポリクリニック（図2）にて画像検査を行い、大会後の調整についてアドバイスを行った。

また、本大会までに外傷・障害があった選手数人に関しては、



のギリギリまで選手のホームでの調査が可能であったことと、いったん選手村に入ると自由に動けなくなることもあり、選手ごとに入村日が異なっていた。また、入村した後もハイパフォーマンスセンター（HPSC）における調整が可能であり、そこでは決められたルールに則ってトレーナーとの接触が可能であったため、多くの選手がHPSCを利用していた（基本的にHPSCもバブルの一つであり、HPSC対応医師、トレーナーの行動は制限されていた）。

選手主体で動けることは選手には良かった点が多かったものの、その反面、選手の健康管理を十分に把握しきれない可能性が危惧されたため、HPSC対応ドクター、トレーナーと綿密に連携を取りながら最善のサポートに努めた。HPSCのJISSクリニックとの連携が図れたことも大きく、装具対応や内科的疾患に対する専門的なコンサル、処方など、最大限の活用ができたものと思われる。何より緊急事態におけるJISSクリニックでの診療などのバックアップ体制が整っている環境であったことがたいへん心強いサポート体制であった。

図2 選手村内ポリクリニック



図3 選手村内トレーナールームでのサポート活動

図4 競技会場サブトラックでのサポート活動



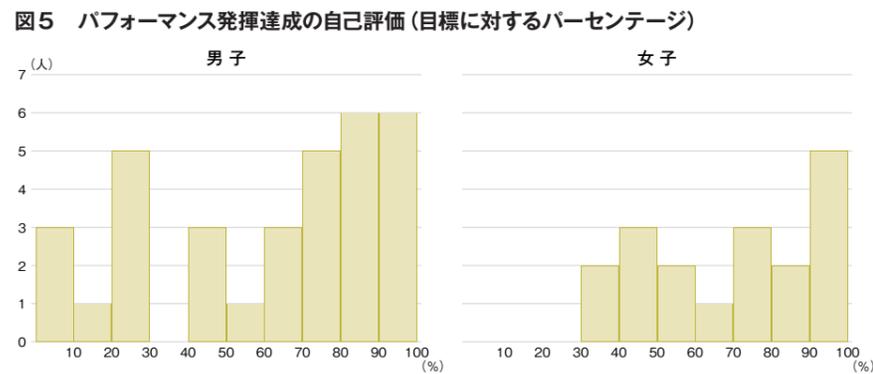
まずは試合に出ることを目標として調整のサポートを行った。しかしながら、試合までの練習や当日のコンディショニングはベストとは言えず、最大限の力を出すことができなかった。(図3、4)

### 選手に聞いた参加後調査

前回のリオオリンピックに引き続き、本大会終了後に選手のコンディションとパフォーマンスに対する調査を行った。

#### #1 パフォーマンス達成度

目標に対するパフォーマンス達成度は平均67.0%であった。男子は64.1%、女子は72.2%と女子の方が達成度は高い傾向にあった(図5)。目標の90%以上発揮できた選手は13人(25.5%)、80%以上まで含めると25人(49.0%)であった。逆にうまく発揮できなかった選手もあり、9人(17.6%)が目標の30%未満であり、すべて男子選手であった。大きな大会におけるパフォーマンス達成の難しさを改めて認識した。



## 4 Road to TOKYO 2020 オリンピックまでの道のり

帯同ドクターの役割は大会に帯同するだけではない。今回のオリンピックに合わせて、陸連医事委員会においては2017年から東京2020におけるメディカルサポートの体制が始まった。山澤医事委員長から、東京2020の帯同ドクターとして活動することを指示され、「オリンピックにおいて選手が最高のコンディションで、最高のパフォーマンスを発揮できるようにサポートする」=「オリンピックに安全に選手を送り出す」ように最大限のサポートをすることが課題として挙げられた。

我々の中では2017年からオリンピックの戦いが始まっており、ドクターだけでなく、トレーナー部の常友トレーナーと宮澤トレーナーとともに選手のサポートを行った。むしろこの2人のトレーナーが選手に寄り添い、情報や現場の希望を多く収集し、ドクターとの仲介役となっていた。

#### #1 国際大会帯同

代表選手が決まるのはオリンピック間際であるため、それまでに代表候補・強化選手が出場する国際大会にはできる限り帯同し、選手のサポートを行うこととした。2018年アジア大会(ジャカルタ/図6)、2019年アジア選手権と2019年世界選手権(ドーハ/図7)がオリンピック前の大きな国際大会であり、

#### #2 パフォーマンスに対する健康状態の影響

ケガや体調などの健康状態がパフォーマンスにどの程度影響あったか確認したところ、6人(11.8%)より回答があり、その影響は20~100%であった。

「影響が100%」と回答した選手は、大会中にパフォーマンスに影響するスポーツ傷害を受傷したため、応急処置などを行った選手であった。「影響が50%」と答えた選手は、大会前に痛めていたところがあり、レースには出場できたものの達成度は十分ではなかった。この2人がパフォーマンス低下に健康状態が50%以上影響した選手であり、リオオリンピックの同調査の結果16.7%よりも少ない結果であった。自国開催で、ギリギリまで健康状態はうまく調整できていた可能性が考えられた。

同じメディカルメンバーで帯同してサポートすることができた。オリンピックに出場するためにステップアップする大会であるため、記録や順位を狙う選手も多いことから、スポーツ傷害に対するフォローに対しては極めて神経を使った。

#### #2 国内大会や合宿でのサポート

国内での活動に関するサポートも充実させることが目標として挙げられた。筆者だけではなく医事委員会内のサポートドク

図6 2018アジア大会



図7 2019世界陸上ドーハ



ターが分担して、日本選手権や日本グランプリシリーズなどの主要大会にサポートとして参加し、選手のコンディションをチェックする活動を行った。また、チームジャパンとして実施する合宿やジュニア世代を対象とした合宿にできる限り参加させていただき、選手とのコミュニケーションの中から日頃困っている問題点などを抽出できるように工夫した。

#### #3 コンディショニングチェック

これまでいくつかツールを用いてコンディションに対するチェックを行ってきたが、今回はオリンピックに向けて、ONE TAP SPORTS アプリ等を使用して、選手のコンディションを

## 5 To PARIS 2024 最後に

筆者はこれまでジュニア世代のサポートを中心で行っていたこともあり、高校生・大学生世代を経て活動してきた選手の成長の過程(肉体・精神的にも、パフォーマンス的にも)を見ることができた。その中で個々に合わせたサポートを尽くすように努力をしたつもりであるが、ジュニア世代からシニア世代、そして東京2020出場へと結びついた選手たちの活躍をサポートできたことはこの上ない経験となった。

可視化し、チェックを充実できる体制を整えた。日本選手権前、代表選手が確定した日本選手権後、大会直前の3つのステージに分け、1週間に1回登録し、その内容によりチームドクター、トレーナーがアセスメント及びサポートを行うという内容であった。選手からの情報を確認できるツールとしては有効に活用できたと思われる。

しかしながら、選手の登録の負担やフィードバック方法、コーチ、パーソナルトレーナーとの連携、大会直前の登録方法など、さらにスムーズに活用できる検討すべき運用方法がいくつかあった。今後の課題として検討している。

一番感じているのは、選手たちを継続してサポートできる体制が整うことである。数年前から数多くの選手たちとコミュニケーションをとり、その場その場での対応を慎重に検討してきたこの体制を今後も続けられるように、医事委員としてバックアップしていきたいと考えている。

しかしながら、スポーツ傷害はゼロになることはなく、オリンピックを目指してきた多くの選手の中には外傷や障害で代表を逃した選手や、本大会においてもコンディションの不具合により自分のベストパフォーマンスが出せない選手がいることは事実である。少しでも選手が自分の活動に満足できるようにこれからもサポートしていきたいと考えている。

すでに2024年パリオリンピックに向けてのサポートは始まっている。今回は3年間、いや……今となってはもうまる2年しかない。

